

パロマレスへの水爆落下の後処理と核兵器事故

50年前（1966年）の1月17日、地中海上空を飛行中の米爆撃機 B 52 が空中給油機と衝突、墜落し、搭載していた水爆4個がスペイン南部の漁村パロマレスに落下（3個が地上に、1個は海中に）。地上に落下した2個は起爆用火薬の爆発でプルトニウムが飛散し、周辺地域を汚染した（海に落下した1個は後に回収された）。米軍は汚染土の一部を回収し持ち帰ったが、スペイン政府は汚染地域を買収し、鉄柵フェンスで封鎖。汚染土壌除去費用と汚染土の引き取りを米政府に求めてきた。

事故から半世紀たった昨年10月、両国政府は汚染土壌処理についての覚書に署名し、土壌を米国内に運搬することとなった（2015年10月21日付「しんぶん赤旗」）。

世界の核兵器事故は枚挙にいとまがないほど多数あるが、いくつかを挙げてみる。1968年1月21日、デンマーク領グリーンランドのチューレ空軍基地西方での水爆搭載機墜落と放射能汚染事故や、1965年12月5日、鹿児島県喜界島の南東150キロを航行中の空母タイコンデロガで水爆搭載戦闘機 A-4E がエレベーターから海中に転落、水深5000メートルに爆弾、機体、乗員とも回収を断念したこと、などはかなり知られている。また、ロシア北方艦隊の原子力潜水艦「クルスク」が核兵器を搭載したままバレンツ海で沈没、乗員118人とともに引き上げられていないことは映画にもなった。米国内では毎年、核兵器事故が多数発生していることが報道されている。

米ソ全面戦争の瀬戸際にあった冷戦下ではミサイル部隊でも一触即発の危機にあったことを毎日新聞（2015年3月15日付）がスクープした。米国の施政権下、本土復帰前の沖縄には大量の核兵器が貯蔵・配備され、アジア太平洋地域で「最大の核弾薬庫」の役割を担わされた。射程2200キロ超の核巡航ミサイル「メース B」は、読谷村など4か所の発射基地に配備、計32基のミサイルがソ連極東や中国を射程に収めた。1962年キューバ危機の際の10月28日、読谷村の発射基地に発射命令が届いた。標的情報に疑問を持った現場指揮官の判断で発射が回避されたが、沖縄と日本の運命にかかわる重大事態であった。沖縄返還後は、メース B をはじめ地上配備の沖縄の核兵器は順次撤去されているが、日本に寄港する米艦船や航空機積載のミサイルや魚雷などの弾頭は、核、非核両用の仕様でいつでも使用できる状況にある。

米、露など九か国が保有する16,000発の核兵器（SIPRI年鑑2014年版）は、保有だけでも重大事故発生の危機的状況にあり、一発でも使用すれば破滅的な結果をもたらすことを世界は知っている。「全面禁止条約の締結」「日本を戦争する国にするな」を高く掲げ、その実現に向かって前進したい。